

特・1054

精神薄弱幼児の治療教育の研究(4)—個人差と教育効果—

〇川島 杜紀子 小林 節子 津 守 真 堤 順子 西山 恭子
 (日本総合教育研究所) (お茶の水女子大学) (同 左) (日本総合教育研究所) (同 左)

目的:

前発表における精神弱幼児グループには、単純精神弱ばかりでなく、精神病的傾向をもつもの、脳炎の後遺症等のケースも含まれている。当グループの治療教育において、このようなケースの子ども達にも前述の一般的な原理を適応した結果子どもの発達にどのような効果をもたらすかを明らかにしたい。また子どもの特性に従った治療教育計画や内容を確立するための裏付けをするのに意味をもつであろう。

方法:

個人別に記録を整理して、後に述べる分析により結果を考察した。ここでは次の2つのケースについて述べる。

ケース1 (つねあき) 昭和33年7月4日生

正常出産 始歩1才10ヶ月
 2才の時 興奮して眠らない
 乳幼児精神発達検査 発達指数 28
 乳幼児精神発達質問紙 発達指数 28
 既往歴; 特記すべきことなし。
 性格特性; 自発性、意欲が極度に欠けている。理解できないような行動(爪をじっと見る、理由なく泣く、物をかじる等)が多い。

昭和38年3月より当グループに通園。極度に能力が低いのでグループでもお落様の存在であった。

ケース2 (ひでとし) 昭和35年3月28日生

正常出産 未熟児 乳児期発達正常。
 始歩 2才
 生後1才の時麻疹脳炎 その後月に3~4回ひきつける。脳波測定; 顕著なスパイクが見られる。

乳幼児精神発達検査; 測定不能
 乳幼児精神発達質問紙; 発達指数 44。
 性格特性; 落つきなく衝動的行動が多い。

分析; 記録より抽出した行動のリストを整理し下記のような分析項目を定めた。

- I 指示誘導に対する反応
- ① 指示誘導を理解して従う。

② 指示誘導を理解して従わない。

③ 無関心

④ 拒否

II 場面参加

① 自発的場面参加(i)

② 自発的場面参加(ii)

③ 自発的活動の展開・発展

④ 誘導による活動の展開

⑤ イマジネーションを理解した場面の展開

⑥ 満足感の表現

⑦ 消極的参加

⑧ 破壊的参加

III 対人的行動

① 動作によって自分からはたらきかける。

② 言語によって自分からはたらきかける。

③ 好意的にはたらきかける。

④ 子どもからのほたらきかけに反応する行動

⑤ 子どもからのほたらきかけに反応しない行動

⑥ 好意に対して反応する行動

⑦ 好意に対して反応しない行動

IV 攻撃的行動

(1) 人に対する攻撃的行動

① 衝動的なもの ② 物をとる

③ 注意をひく ④ 好意が攻撃になる場合

⑤ 他の子どもの攻撃に対して反応する行動

(2) 物に対する攻撃的行動

① 衝動的に物を投げる

② 注意をひくために故意に投げる。

③ 反抗して物を投げる

④ 衝動的に物を傷つめる

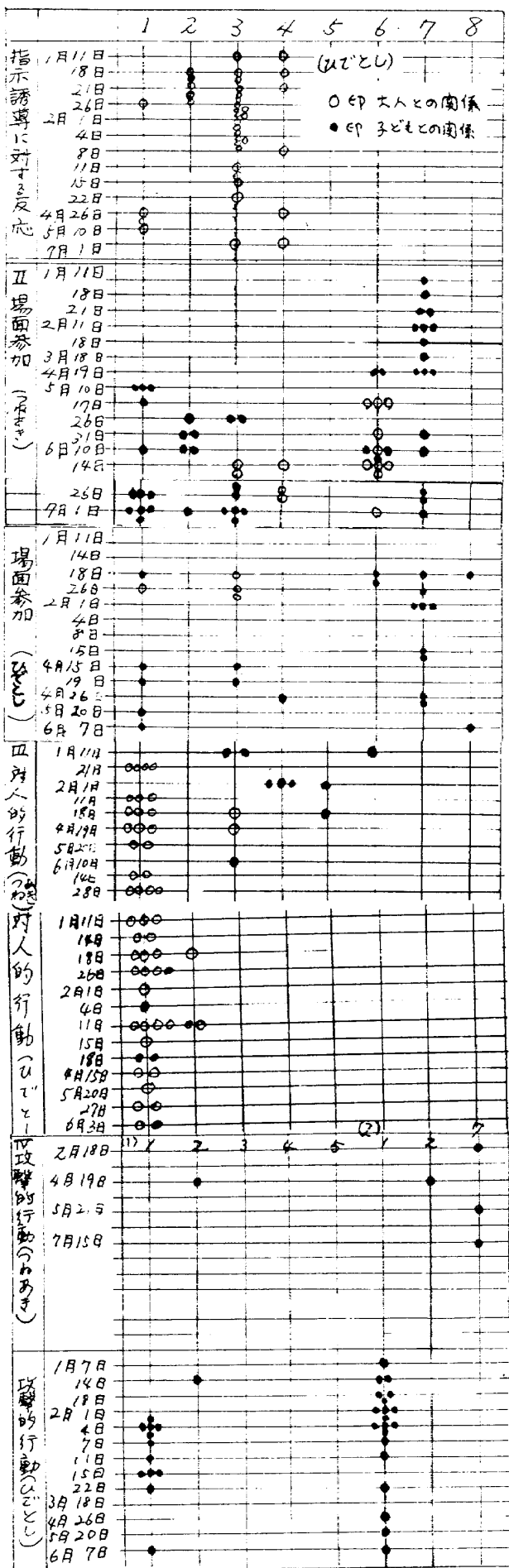
⑤ 注意をひくために傷つめる。

⑥ 反抗して傷つめる

⑦ 常習的行動(かじる等)

結果;

		1	2	3	4	5	6	7	8
I 指示誘導に対する反応	1月11日			●	●				
	1月18日			●	●				
	2月21日		●	●	●				
	2月18日			●	●				
	3月18日			●	●				
	4月19日	●	●	●	●				
	5月17日			●	●				
	5月20日			●	●				
	5月31日	●	●	●	●				
	6月10日	●	●	●	●				
	6月14日	●	●	●	●				
	6月28日	●	●	●	●				
	7月1日	●			●				



上記の結果をより考察しやすいようにこの子ども達の典型的な種と思われる場面を下に示す。
 実際例 ケース1(つねあき)

先生のはらきかけ	つねあきの反応
入口からかかえてくる	泣く 拒否
かいて見せる	見ていない
かいて見せる 放任	見ていない 笑う
どうぞ、とかいて見せる	クレヨンを持つ。先生の方へおく。手を見る
持たせる かいて見せる	おとす。先生の手をさわる。くみこのもっているクレヨンの方へ手をのぼす 自分の指先を見る。笑う。
だいてつれて来て手に絵の具をつける。紙にペタペタやらせる	先生の腕からのがれる。いつのまにか来て絵の具を手につけている。
やらせようとする	這つてにげる
まさひろ先生にとびつ	まぬしてだかれる
く	うれしそうに笑う
だいて。かいて見せる	見てわらう

考察；このケースはとかく放任されがちであるので、最近特に個人的に留意して指導の機会を多くして見た。その結果前の分析結果とこの指導事例に見られるように行動の変化が生じている。このようなケースについても指導法によつては、効果が上がると考えてよいと思う

ケース2(ひでとし) 常に誰かがおいていないと危険であり、グループ指導することの適否が問題となっている事例である。

汽車ごっこにぞう	無関心
つみ木にぞう 積む	手で払いのける。
下をい	つみ木を投げる
名前をよぶ	ピア)にのる。レコードをおとす。いすをい
	つくりかえす。無関心

考察；この事例においては指導場面における変化が認められよい。前記の分析に於ても全般に変化が見られるケースである。しいて言えばおとなに対するおつきかけが多くなつており、教育効果が全然ないとはいえないであらう。しかしながらこの例に見られるように脳炎後遺症で行動も衝動的で粗暴であり、禁止を理解できないようなケースにどのような方法で治療教育を実施してゆくのがよいのかは 今後の問題である。